

## 「お天道様が見ている」 作者不詳

企業経営漫談士 岡野実空

我がラスト(50)スパート22回目は、定本最後の第21章「コーポレートガバナンス」。今回の主人公は表記の作者ではなく、その格言を語り継いできた我が先人たち。ここではその意味するところを改めて確認し、『ゼミナール経営学入門』の振り返りを締め括ります。

### その1: 格言の背景

「ガバナンス」とは、西洋中世のルネサンスに伴って浮上した概念。それまでの「神」中心の社会から、「人間」を開放しようとする中、さまざまな集団の「統治」も人が行うことになったからです。

一方、私たちの祖先が恐れ、敬ったものは自然。それも神がつくった西洋とは異なり、日本では山川や森林など、森羅万象に霊が宿り、その一部はご神体として崇められてきました。またそこに棲む熊などの動物も同様です。そんな科学とは無縁の世界で、我が祖先たちが、太陽をその頂点に位置づけたことは何の不思議もありません。

もっとも科学を少々齧った現代人も同様で、日常は散々理窟を並べながら、崇高なご来光に臨んだりすると、思わず手を合わせてしまいます。

### その2: 格言の真意

今回の格言の起源は、もはや探索不能。またその後、我が国に伝来した儒仏道などの教えは、そんな土着の信仰と融合しつつ、徐々に社会に浸透して行きました。その中で「お天道様」という言葉は、「天を主宰する神々」あるいは「太陽」の意味で使われ、そこに暮らす人々の最終的な監視役を引き受けてきました。それは文明開化で新たな「宗教」が伝来しても変わらず、その神を取り込んでさらに守備範囲を広げ、今日に至っています。

しかし近代に入り、人間は科学技術の恩恵に浴して欲望にまみれ、劣化が進んでしまいました。中でも目立つのは、一見「宗教」とは無縁の人たち。特に一部の人々による「科学」や「経済」などの万能視は、もはや「信仰」の域に達し、それがもたらす社会的な弊害にまったく無関心という、由々しい事態を生み出しています。だからこそいまこの格言は、表現の「軽み」とは裏腹の、内容的に「ずしりと重み」のある「口ぐせ」として、ルネサンス(再生)が求められているのです。

### 『三々な経営』

0-4 企業はだれのものか

0-19 企業の社会的責任

### 『四字熟語』で考える経営戦略

YF-5 付録「経営資源」ヒト その5

### 次回予定「ドラッカーの名言」シリーズ

### その3: 定本の確認と発展

定本最後の第21章は、「コーポレートガバナンス」がテーマ。それは企業そのものを誰がどのように統治するかであり、株主(カネ)と従業員(ヒト)を主とした、「経営者」のチェックが中心課題です。そこには「規律づけ」だけでなく、「任免」まで含まれますが、最終的にはその適性の判断と、不適格と判断した場合の誠首問題に行き着きます。

さてその後、定本の共著者である伊丹先生は元々の根拠である「性悪説」に、人間の弱さを踏まえた「性弱説」を加え、「コーポレートガバナンス」の重要性をさらに強調されました。そして後日、自身が社外取締役を引き受けた某電機メーカーの取締役会で、自ら「性弱説」の正しさ?を実証して見せたのです。かつての監視役だった金融機関や労働組合の力が弱まったいま、多くの企業にとって、それは最大の難問となっています。

以上を踏まえると、最後に行き着くのは「自分」。そこで定本の振り返りを、理論と実践の両面にわたり、これまで私に最も多くの示唆を与えていただいた、三菱食品(旧菱食)元会長の廣田正氏の言葉で締め括ります。それは商法改正に伴う、社外取締役制度の導入について尋ねた際の返答。

「他人の監視を受けないと正しい行いができないような人間は、取締役を引き受けてはいけない」

お天道様が沈んでも、「自分」は見ている!

2022年7月4日 実空